
封鈴堂怪喜譚

椀滝 秋乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封鈴堂怪喜譚

【Nコード】

N3780S

【作者名】

椋滝 秋乃

【あらすじ】

京都府某所の骨董屋『封鈴堂』。そのおんぼろな骨董屋は、時代に否定された魑魅魍魎や妖怪変化の集まる、現代の特異点だった。高自給に釣られ封鈴堂でアルバイトを始めた九十九慧は、店長で同級生のお嬢と共に、不本意ながら店を訪れる多様な怪異とのドタバタな日々を過ごすことになっていく。

封鈴堂のお客さま

メリーさんの電話、という都市伝説をご存じだろうか？ メリーと名乗る少女から、ただ現在地を知らせる電話がかかってくる、という怪談である。

ただそれだけの話が何故怪談たりえるのかというと、それには二つの理由があった。

一つは、メリーさんは電話の度に近づいてくるということだ。正体不明の存在が近づいてくる切迫感と、もしメリーさんと会ってしまったらどうなるのかという想像が、重量感のある実体なき恐怖を作る。

二つは、この怪談には決まった結末が存在しないことだ。怪談の締めくくりはもっぱら、

『あたし、メリーさん。いま、あなたの後ろにいるの』

であり、このあと被害者になにが起きたのかは、聞き手の想像によつて補足されて、聞き手当人が恐怖を作り出すのだ。

現にその発露である『続編』や『結末』が大量生産されているし、怪談自身も時代に合わせて改良されながら人々に語り継がれている。もっとも携帯電話にまで適応を果たしたメリーさんだが、いまだにコントじみたオチに使われることがほとんどで、あげくツンデ靈なる亜種まで創造されている。

とまあ、なぜインターネット百科事典から転載したような説明をしたかといえ、俺がいま対応している電話が、まさにそれだったからである。

昔懐かしき黒電話が、鈴のような声で『メリーさん』と名乗ったのが、ほんの一秒前。怪談の内容を知っているゆえに湧き上がる恐怖が喉に詰まり、心拍数をはねあげる。

メリーさんは怪談のセンテンスを律儀になぞっている。いまだここにいるのか？ あとどれだけ時間が残されているのか？

『いま、あなたのマンションの前にいるの』

「間違いです」

ガチャン、と漫画でも見なくなった効果音とともに、電話機に受話器を叩きつける。現在地は小さな骨董屋のカウンターの中なので、メリーさんの電話は完全にかけ違いだ。

骨董屋『封鈴堂』。とりあえず立派で由緒のありそうな名前だが、その実態はごみ屋敷といわれても仕方がないだろう。

店舗の外見は、どう見間違えてもマンションにはほど遠い、木造二階建てのボロ家だった。

店内も、床には大小様々な壺やら木箱やらが散らかされていて、通路が確保できているのが不思議なくらいの散らかりようである。品棚も行き当たりばったり増設してきたのがわかるほど入り組み、どこになにかがあるのか、正直バイト身分の俺には把握できていない。だが、乱雑な店内にはほのかに煤の香りが漂い、一応骨董屋らしい古さをつかがわせた。

商品もいかにも高そうな人形やら絵皿やらから、南国のお土産にしか見えないお面までさまざまで、ついでに付けられた値段も幅広い。最安値は一ケタに片足を踏みこんでいるが、高いものは0が七つ並んでいることもざらである。その辺の基準も、目利きではない俺にはさっぱりわからない。

ちなみに備品のように扱っているものも大半が商品らしく、さつき叩きつけた黒電話は千円、カウンターの高いレジは五千円、腰かけているパイプ椅子は五百円のシールが貼ってあったし、必要があれば他の商品も自由に使っていいたい。商売人としてその辺どうなのか気になるところだが、店長の言うことだから、バイト身分に意見する理由はない。

来客もなく暇なので、混沌とした品棚からなぜか発掘された有名漫画誌の初版本一（百円）をめぐり、飲み口の欠けた湯のみ一（五十円）から緑茶一（俺の持ち込みプライスレス）をすすする。

半ばプライベートスペースになり下がったカウンターで、暇とい

う名の職務を全力で謳歌していると、店の奥から女性の声が飛来した。

「電話、どちらからー？」

まだ若いが落ち着きのあるその声の主が、我が店長にして雇い主。黒電話のジリリ音は意外と響くので障害物の間をすり抜けて、店の奥まで簡単に届く。

俺は、特におもしろくもない古ぼけた誌面に目を落としたまま、投げやりに返した。

「異世界からの間違い電話」

普通のバイト先でこんなふざけたこと言ったら即首だろうが、ここではそうならない。なにせ他ではタチの悪い冗談にしか聞こえない言葉が、ここ封鈴堂については事実を伝える言葉に化けるのだ。

少しお茶請けが欲しくなってカウンターをあさると、お煎餅を見つけたが、食えるのかどうか疑わしいので、仕方なくお茶だけで諦める。

その折、店長が品棚の影から、よっこらせ、と現れた。

彼女を端的に表すなら、大和撫子。つややかな漆黒の長髪と、人形と形容してもいいような柔和な顔立ち。だが和人形というよりは、フィギュアの造形師が日本女性をイメージして作ったような現代的な愛嬌があった。ついでに言うところ十七歳の高校二年生で、俺の同級生。客が彼女をお嬢と呼ぶので、俺もそれに倣っている。

日曜日なのに何故か制服姿。その上にエプロンという格好で、いかにも重そうな壺を抱えていた。

「またメリーさん？ 今週で四回目だっけ？」

「六回目だよ、お嬢」

お嬢こと九十九^{つくもふみ}巫末のうんざりとした調子に、俺も漫画をたたみながら返す。

いまどき『メリーさんでいたずら電話だぜ』というバカは、骨董品を通り過ぎて天然記念物だろうし、封鈴堂がそういう天然記念物級のバカから熱烈に愛されているわけもない。

変な話だが、さっきの間違い電話を含めて『ホンモノ』ということだ。事実、六回のうち二回は俺の後ろに立つところまで来た。

もちろん、客として。

「で、その壺なに？」

「幸福の壺」

胡散臭さがトリプルアクセルをきめた。

「値段は八十万円ね」

「高いなおい」

しれつと言つてのけたお嬢の端麗な顔が、なぜか詐欺集団のリーダーに見えた。

しかし、自信満々のお嬢に言いきられると、わりと適正な価格なんじゃないかと思えてくるから不思議。滑らかそうな、それでいて土の質感を残した焦げ茶色一色の素朴な外見は、種類こそわからないが、相応の年月を経たものだろう。たぶん。

壺の口が布で蓋がされていることに気付かなかったら、なおよかった。一カ月の勤務でいやというほど経験したが、こういうのは大概ろくなものじゃない。

「一応訊いておくけど、それなんでふたしてんの？」

「幸福が逃げるからよ」

「壺の中に閉じ込めちゃったら、あんまり意味ないよね？」

「幸福が全部逃げ出して、最後に残るのは貧乏のみ」

「それどんなパンドラの箱？」

それは不幸の壺だろ常識的に考えて。

よいしょ、と床に壺が置かれる。その拍子に中身が揺れたのか、ゴトンという重たい音に続いて

『ウヲオオオオー』

地獄から這い上がってきた亡者のような絶叫が、手狭な店内に響き渡った。壺全体を震わせる絶叫は十秒ほど続き、前触れもなくぴたりとおさまる。

しばし呆然とする俺に、お嬢は悪魔的な笑みを向けてきた。

「開けてみる？」

「遠慮しときます」

鬼が出るか蛇が出るかわかったものじゃない。文字どおりの意味で。

これが封鈴堂の日常だった。

魑魅魍魎とか妖怪変化とか呼ばれるモノたちが集まる、オカルトの中心地。科学万能時代に取り残された『外側の存在』が集まる場所。あるいは常識のキルゾーン。

俺こと九十九慧^{つくもけい}が勤める骨董屋は、あらゆる非常識を絵にかいたような、現代の特異点だった。

両親のきつかない教育方針と自由な生活へのあこがれから、一人暮らしを始めて早一年。『いい加減自活しろ』と理不尽な経済制裁が執行され、仕方なくバイトを探したのがつい先月の話。

一番の後悔は、たまたま拾ったチラシの、時給千五百円という破格さに釣られ、その下に小さく書かれた条件を見落としたことだ。曰く、

『大概のことではやめないこと』

そうして放課後の道草に寄った骨董屋にて、即日面接即日採用即日勤務という素晴らしい三連コンボをきめられて、現在に至る。

おかげで平均的な一般人だった俺の常識は、こっちの世界の常識によって木っ端みじんに砕かれた。クラスメイトが店長ということにも最初こそ戸惑ったが、即日勤務のところに来店してきた有象無象に比べれば些細なことだった。

今までは週二回のペースで金縛りにあっても疲労と片づけ、夜通し鳴っていたラップ音には耳をふさいできた俺の常識防壁も、圧倒的な現実を前にあっさり白旗をあげた。

回想からにじみ出た苦々しさがよほど顔に出ていたのか、お嬢は整った眉を軽く釣り上げた。

「なに？　なんか不満？」

「めっそうもない」

戸惑いはあるが、不思議と不平や不満はなかった。来客がなければカウンターでお茶をすすっているだけ。それで超時給なんだから、文句を言ったら世間さまのバチが当たる。ただ世間一般の常識とか、離れたことのオンパレードであることは間違いなく、それらが苦しい思い出となるのは仕方ないことだと思う。

お嬢はなにか得体のしれないものを観察するようにジトッと俺の顔を見つめ、なぜ盛大にため息をついた。

「普通はなんか、不満の一つくらい出てもいいような気がするんだけど」

「じゃ給料あげて」

「却下」

ですよねー。

「ほんとに不満とかないよ。いやまあ、いろいろ驚いたこともあったし、世界観とかもわりと逆転したけど、仕事は楽し」

「世界観が逆転したりしたら、普通鬱になったり疑心暗鬼になったりするものだと思う」

わかってるならバイトなど雇うな、と心の中で叫んでおく。

俺は心霊や妖怪とかに対抗できる、オカルトな力については無能力だ。お嬢もそう言った能力とは無関係らしいが、ずっと非日常と接してきたため、オカルトの扱いには一日の長がある。

ちなみに来歴からわかるとおり、姓は同じでも俺とお嬢は何の関係もない。

つまり、俺は慣れようが認識が変わろうが、ただの善良な一般人。そんな俺なんだから、いつだか店内に侵入した黒猫が女の子に化けたときは心臓が数秒止まったし、呪いの人形に背後を取られたときは生きた心地がしなかった。ちなみにその猫 通称タマちゃんは今では常連だし、呪いの人形とはたまにトランプとかして遊んでいる。我ながらすごい、というかひどい環境適応力だとは思う。

もちろんこの適応力には裏がある。日常的に金縛りやラップ音にあっていたのもあるが、もう一つ俺には隠し事があった。

ずっと昔、妖怪や幽霊を人並みにも信じていなかった頃、なぜか唯一ホンモノだと思えた怪奇との遭遇。封鈴堂でそういう常識の裏側が実在すると知り、逆にいくつかの疑問に納得出来ていた。

もつとも、その話はお嬢にすらしていないが。

メリーさんの間違い電話からは、お昼を挟んでも来客なし。週一の貴重な日曜日に、午後までただ座っているだけというのも、なかなか苦痛かもしれない。

壁掛けの古ぼけた時計を見ると、いつの間にか午後二時になっていた。

暇だし店の掃除でも、とも思ったがやめておく。いつだか掃除のやり方が悪くて、南国風の妖精さんに追いかけまわされたことがあった。

ついにうとうとしてきたところに、黒電話のけたたましいベル音が飛び込んできた。黒電話の呼び出しは頭の奥の奥まで突き抜けて、眠気を根こそぎ刈り取ってくれる。

「まいどありがとうございます。封鈴堂骨董店です」

『もしもし？ あたし、メリーさん』

耳にあてた受話器が午前中と同じようにささやいたせいで、腰が砕けそうになった。

またお前か、と叫びそうになったが、どうやら午前中とは違うメリーさんらしい。変な話だが、メリーさんの電話は複数存在するらしく、何回も間違い電話がかかってくる。お客だったら困るので、反射で受話器を戻そうとするのを気合で抑え込む。

「で、いまだどこにいるんだ？」

『封鈴堂の前にいるの』

「いきなり近いな」

だんだん近づくことで恐怖をあおるのがこの怪談の醍醐味なのに、真っ向から無視とは珍しい。というか新しい。

いったん電話が切れる。すでに店の前にいるならすぐ次の連絡があるだろうが、とりあえず品棚に腰かけてぶ厚い本を読んでいたお

嬢に教えておく。

そして甲高いベル音。さっきの続きとわかっているだけにまったく怖くないどころか、ままごとじみたむなしさを感じながら、投げやりに電話口へ吹き込む。

「まいど、骨董屋っす」

『もしもし？ あたし、メリーさん』

「で、今度は？」

通り過ぎたと言ったら怒るぞ。

『いま、あなたの前にいるの』

「後ろじゃないのか！」

気付くと、カウンターの上に、一体の和人形が忽然と立っていた。いつからそこに、とカウンターを挟んだ対面のお嬢に目配せするが、彼女も目を白黒させながら首を振った。

いわゆる市松人形というやつだろうか。白粉を塗ったように真っ白な顔はふつくらと優しく微笑み、暗い紫の布地に質素ながら優美な紅葉の刺繍を施した着物を着せられている。だが、柔らかく細められた瞳には、心を見透かされるような奇妙な光を宿していた。

一目でわかる。付喪神だ。

だが、腑に落ちないことが一つ。

「どこがメリーさんだ？」

メリーなんて外国人の名を純日本製の和人形が名乗っているのを、自分でおかしいと思わないのだろうか。

三度目の呼び出し音。どうやら直接発声する器官を持っていないらしく、霊力やら妖力やらといったオカルトな力で電話に干渉しているんだろう。直接聞き手の心なりし神経なりしに力を及ぼせばいいのに。まあ、このバイト生活で、妖怪や神様には理屈や合理性を超越して『できない』パターンが多くあることは知っているが。

『えっと、ものを売りたいんですけど』

「俺の疑問はスルーですか？」

人形風情にしてはいい度胸だ。

電話の声も、さっきまでの幼げで甲高いかにもな感じから、物静かで大人びた色に変わっていた。いい変声能力、声優業界も妖怪を雇うべきだ。

「で、なにを売りたいんだ？」

お嬢にも話題がわかるように反芻する。テレパシーのようなものを使ってくれればホントに楽なのに。

逡巡するような気配を挟み、人間だったら頬を染めていることがわかるような恥じらった声で

『私を売りに来たんです』

「うん、深呼吸してよく考えなおしてね」

人形の身売りとは世も末だ。

無機物に深呼吸などできるはずはないんだが、受話器の向こうでは律儀に息を大きく吸い込む気配。だが目の前にある本体は微動だにしない。この辺のミスマッチはどういうメカニズムなのだろう？

やがてメリーさんは、自信たっぷりに言った。

『はい、わかりました』

「そうか、よかったね」

『人形は深呼吸できません！』

「そつちじゃない」

なんだ、アホの子か。人形の頭は人間よりずっと小さいわけだから、詰まっているものも相当少ないのだろう。付喪神に脳みそがあるのかは知らないが。

ちぐはぐな会話に頭痛が染み出してきそうになっていると、俺の言葉から意味をはかりかねたお嬢が口を挟んだ。

「で、この人形はなにを売りたいの？」

「自分自身だそうだ」

「へえ」

明日の天気でも聞いたような淡白なりアクション。もうちょっと驚くとか、俺みたいに説得を考えると、することは色々あるような気がするんだけど。

お嬢は美術鑑定士のように目を細めると、人形の足先から頭のてっぺんまで視線を何往復もさせる。まさか、買う気とか言いませんよね？

人形本体は相変わらずふつくらとした白い顔で薄く微笑んでいるのだが、電話の向こうの本心は気の毒なほどあたふたとしている。

『あのお、ダメでしょうか？』

「ダメかって言われるといういる倫理とか人権とか」

「いいわよ、買うわ」

そうですか、買うんですか。俺の良心はやっぱり無視ですねわかります。

「いいの？ 付喪神といっても魂あるものだよ？」

「魂があるうがなかるうが、無機物なのは事実じゃない」

ぐうの音も出ない。

お嬢は品棚から優雅にとびおりると、店の奥のほうに歩きだしながら俺に手招きした。

「価値調べるから、ちょっと手伝って」

「……わかった」

メリーさんには待っているように言いつけて受話器を置き、用心にドアを施錠してから、お嬢を追いかける。行き先は二階だ。

品棚とほとんど同化した階段を探し出し、品棚同然に陳列された商品を踏みつけないようにのぼっていく。

封鈴堂の二階は、骨董屋というより書庫になっている。図書館の蔵書室のように組み立て式の本棚で仕切られたフロアには、古ぼけた紙の匂いが充満していた。

その片隅でお嬢は、さっきまでとは打って変わって物憂げな様子で本を探していた。その表情が高尚な哲学者のように見え、少しだけどきつとする。まあ、彼女が美人なのは今に始まったことじゃないが。

「お嬢、ホントに買うのか？」

疑問が口をつく。どうしても腑におちないのだ。

人形は確かに無機物だが、付喪神が宿っている以上、立派な怪異のはずだ。怪異をただの物と割り切るのは、どうもお嬢らしくない。確かに封鈴堂の品棚を探せば付喪神もかなり見つかるが、そいつらだつてやはり売主の事情を十分に考えたうえで引き取っているはず。まして今回は売主と商品が一致している。どうしてあのメリーさんが身売りをするのか、その裏側がわからない。

付喪神の魂うんぬんを言つて、結局持ち主のことを考えてしまうのは矛盾しているのかもしれないが、それでも納得できない。

お嬢は目当ての本を見つけたのか、紐で綴じただけの黄ばんだ紙束を引き抜くと、その中ほどを開いた。

「買わないわよ、あんな安物」

「安物？」

「ええ。最近の安い市松人形は、石膏とかウレタンで作られているの。プラスチックの塊に骨董価値なんかないわ。気付かなかったの？」

「恥ずかしながら」

一般の高校生に目利きなんか期待しないでほしい。お嬢は父親が有名な骨董品ブローカーで、彼女の目利きはそこに裏打ちされている。ちなみに、封鈴堂の本当のオーナーも彼女の親父さんで、お嬢の表向きの立場は俺と同じアルバイトだったりする。

「でも、そうするとおかしくないか？ 付喪神って長い時間をかけて成立する神様だろ。そんな最近のものに宿るのか？」

「ありえない話じゃないけど、たぶん違う。あの子はおそらく二代目よ」

「二代目？」

「たぶんだけどね。きっとあのこの持ち主は昔、ちゃんとした市松人形を持ってたんだと思う。それをなんかの拍子になくしちゃつて、それで、オリジナルによく似た最近の人形を代わりにしたのね。それが継ぎ足しになって、あのこが付喪神化した」

「そんなことありえるのか？」

言いながら、この質問はナンセンスだったことに気付く。付喪神自体が理屈を超えているのに、そこでありえるありえないと理屈をこねても意味なんかない。超自然的だからこそ、怪異なのだ。苦笑して話題を変える。

「買うとしたら安いのかな、やつぱ」

「大体八十万っていったとこね」

「十分高いぞ」

骨董価値はないんじゃないのか？

「高いのは人形本体よりもあの着物ね。文句なしの超一流工芸品。人間サイズだったらロールスロイスとだってタメを張れるね」

ロールスロイスって、大金持ちの代名詞のあれだよな？ 安くても数千円はするっていう。貧乏学生どころか、一般的な金銭感覚では天文学的な数字だ。

「そんなもん、誰が安物人形に着せるんだよ？」

「それを調べてるのよ」

お嬢はうるさげに手を振った。手伝いに自分で呼んでおいてひどい扱い。労働条件や怪異関係よりも、お嬢の態度の方がよっぽど転職要因になりそうだ。

彼女の読んでいるのは、伝票の束だった。表紙の表記を見ると、大体昭和初期から太平洋戦争の終結あたりまで。妖怪たちから聞いた話によると、今のボロ家で商売を始めたのは大正の終わりくらいからで、封鈴堂自体は江戸中期に開店したらしい。そのため、伝票などの古い資料には事欠かなかった。

「あつた」

少しすると、お嬢はあるページを開いてこっちに向けて開いた。黄ばんで少し波うっている古い紙面には、なにかが達筆で走り書きされているが、バリバリ現代っ子には古代象形文字にしか見えない。

「ごめん、まったく読めない」

恥を忍んで言うと、お嬢は深くため息をついて、英語の訳文を教

えるように説明してくれた。

「昭和十四年十月二十日に呉服屋の息子に市松人形を一体売った、
って書いてあるの。値段は、タダ？ ひいおじいちゃんも気前がよ
かったのね」

「息子？ 娘じゃなくて？」

「誰かへのプレゼントだったんじゃない？ ひいおじいちゃん、そ
ういう話に弱かったし。買い手の住所は京都府……あら、隣の市じ
やない。これでいろいろはつきりしたわ」

「ばたんと伝票の束をたたんで棚に戻す。」

呉服屋に売った市松人形に、高級品を着せられた安物の付喪神の
身売り。いくら馬鹿な俺でも背後関係は予想がついた。

「最近は伝統工芸も、後継者不足やら企業的大量生産やらに押され
て相当苦しいらしいな」

染物屋の職人が観光タクシーのドライバーをしている、という話
を聞いたことがある。ましてや超不景気の世に、そんなアホみたい
な値の高級品なんてとても手が出ない。苦しい家計を助けたい、と
いうのがあのこの事情だろう。

一方で、そこまでメリーさんを献身的にさせる、持ち主の人物像
も簡単に想像できた。

室町の書物『付喪神記』に器物百年とあるように、長い時間を経
て付喪神は生まれるとされている。九十九神という本来の表記の通
りだ。

だが、あのメリーさんは最近のもので、とても付喪神になるほど
の年月は経ていない。お嬢の言うとおりあれが二代目の人形だとし
たら、時間を経たのは持ち主の思いだ。一代目がなくなってからど
れぐらい年月がたっているかはわからないが、売られてから太平洋
戦争を挟んでいるなら、大方の予想はつく。一代目から二代目に思
いがバトンタッチされるまで、少なくとも四十年はあっただろう。
そしてその間の、ないものを大切に続けた思いが、あのメリーさ
んには蓄積されている。

「持ち主の人、あのこがいなくなったら悲しむだろうな」

「こんな世の中に付喪神になるまで大事にしたんだから、当然ね」
すべて状況証拠からの推理にすぎないが、それでも付喪神になるまで愛したモノが消滅すれば、その悲しみは想像にあまりある。

「で、どうやってあの厄介なお客さまにお引き取り願うんだ？」

「買い取ると言ってしまった手前、下手ないいわけで引き下がることはできない。ある程度筋が通っていて、なおかつあのおバ力だけで優しい付喪神を納得させる理由。最低条件だけ並べてみても、結構な難易度に思えた。」

しかし、お嬢は俺の懸念なんてどこ吹く風、というように足取り軽く階段へと歩き出していた。

「こういう手合いのあしらい方は心得てるわ」

「左様ですか」

自信たつぷりのお嬢にはなにを言っても無駄。俺の展開する正論や懸念を受け入れてもらえない、という意味での無駄ではなく、本当に無意味な懸念だからだ。

彼女が自信を持ってやること、言うことは、俺みたいな凡人の考えることなんかすでに踏まえている。ちよつとした劣等感を感じることも間々あったが、それよりも羨望の方が大きいから、俺は口を閉じて従った。

カウンターに戻ると、人形の向きが店の奥の方へと九十度変わっていた。もうこれくらいじゃ驚かない。

待ってましたとばかりにやかましく鳴りだした電話に、今度はお嬢が出る。二、三挨拶をかわしてから、本題に入った。

「ええ。決まったわ。あなた本体が四十万、付属品が二十万。しめて六十万ね」

息を吐くように嘘をつきますね貴女は。骨董屋の店主より詐欺師の方が圧倒的に向いてると思いますよ。

電話の向こう側はわからないが、きつとすごい喜んでいるんだろう。お嬢も優しげに微笑んでいる。良心がちくちく痛み、俺は顔を

背けた。とても見てられない。

お嬢はメリーさんの歡喜が収まるまでたっぷり待ってから、ついに言葉の刃を返した。

「それで、お金は誰に渡せばいいのかしら？」

「あ……」

盲点過ぎてつい間拔けな声をあげてしまった。なるほど、売主と売り物が同じじゃ、代金を渡す相手がいない。封鈴堂は品物の配達にはしているが、送金サービスは完全に業務外だ。

迂闊に声を出してしまった俺を一瞬非常に怖い目でらんで、すぐに元の微笑みに戻す。

「今度は受取人と一緒に来てね」

そう言って受話器を置く頃にはすでに、メリーさんは姿を消していた。

「はい、一丁上がり」

そうしてお嬢は、いたずら小僧のように舌をだした。

御見それしました。

休日の封鈴堂は、茜日が差しているうちに店じまいを始める。夜は怪異の本領ということで、平日は放課後から夜中まで店を開けているが、その分休日は早めに閉店。

居酒屋風の暖簾を片付けて、営業中の札を準備中にひっくり返す。骨董屋で『準備中』というのも謎だが、つつこんだら負けな気がした。

店の中に戻ると、お嬢は一通り店内の掃除を終えていた。

「おつかれさま」

「うん、おつかれ」

やっていることは俺の方が圧倒的に少ないのに、労ってもらうちよつとへこむ。考えれば、朝早く来てカウンターに座り、夕方まで電話番をしていただけ。ちよつとしたハプニングはあったが、それもお嬢の独力で回避している。

俺のいる意味、ないと思うんだけどな。オカルトに対抗できる特別な力もなければ、お嬢のような聡明さや度胸もない。ああー、情けなさ過ぎて自己嫌悪入ってくる。考えるのやめよう。

代わりの思考を求めていると、あの市松人形のことを思い出された。

「あのメリーさん、ちゃんと帰れたかな？」

持ち主のために身売りに来た、かなり抜けているけど優しい付喪神。

「道に迷ってなきゃいいけど」

「大丈夫じゃない？ 鳥だって自分の巣に帰れるんだから、神様にできない道理はないよ」

「ならいいんだけど」

かなり抜けているだけに、かなり心配だ。そんな俺の内心を読み取ったのか、お嬢はいたずら気に笑って言った。

「人形は持ち主の身代わりになるパターンも多いわね。どっかでひかれてたりして」

「縁起でもない」

あの人形の場合、本当にあり得る話だ。たぶん持ち主のためになるなら、バラバラになるくらいなら平然と受け入れそうだ。それを持ち主が望むかどうかは知らないが。

ひとしきり笑ったお嬢の笑顔に、不意に、陰りがさす。憂いを帯びた聖女のような悲しい微笑みだった。

「そんな風になってまで人に尽くしてくれるモノたちを、多くの人には信じていないのね」

「そうだね」

科学と社会が進化するにつれて、妖怪や幽霊を信じる人間は減少し続けてきた。現に俺だって、封鈴堂に来るまではほとんど信じてはいなかった。

科学という唯物論が世界を席卷してしまったいま、目に見えない存在^{オカルト}だった怪異は存在しない存在へととなり果てたのは事実。

「本当に、それでいいのかな？」

口では疑問の形をとりながら、しかしお嬢の言葉は、はっきりと諦めの色を含んでいた。めずらしく弱気。

バイトを始めて二週間目ぐらいのころだったか、お嬢は言っていた。怪異は、人が信じるから存在することができる、小さな奇跡だと。人の思いの化身である付喪神なんかはその典型だ。そういう存在を人は信じず、やがて忘れていき、そして最後には消滅させてしまう。科学万能時代の幕開けが、古い神様への反抗であったように。幼いころから怪異と一緒に生きてきた彼女にとって、それは絶望の始まりであり、人への失望の表れなのかもしれない。

そこまでわかって何も言えずに同意するのは、なんか男らしくないな、うん。給料分の仕事ができなくて情けなさをかみしめているくらいなら、せめて給料分の言葉くらい並べてみよう。久方ぶりに、男気のようなええかつこしいものがこみ上げてきた。

でも、なに話せばいいんだ？ 肝心な言葉がわいてこなかった。意欲は頭をよくはしてくれない。

何かないかと記憶をひっくり返していると、ふと、大昔の出来事が脳裏をかすめた。小学生のころ、妖怪や神様を子供ながらほとんど信じていなかった時分に出会った、小さな怪異の話。

思いついた時には、言葉がスタートを切っていた。

「お嬢、ずっと黙ってたんだけど、昔、神様に会ったことがあるんだ」

「神様？ いろんなのがいるけど」

「いや、たぶんあんまりメジャーな神さまじゃないと思う」

それは俺がまだ小学一年か二年のころ、地元の大きな祭りにくり出したときのことだ。人混みに母とはぐれて泣いていた幼い俺に、手を差し伸べてくれた少女の話。今の俺と同じ年くらいに見えた彼女は、まるで漫画のキャラクターのような鮮やかな茜色の長髪と、深い血色の瞳をしていた。

あの夜、俺の手を引いて走り回ってくれた彼女が語ったことたち、

いまのいままでほとんど忘れていた言葉が、俺の口をついた

「その神様が言ってたんだ。人が神様を信じなくなるのは、自立なんだって」

「人の自立？ またわかるようなわからないような話ね」

そう言って苦笑するお嬢の瞳には、興味の色が宿っている。少し調子が戻ってきたようだった。安心安心。

俺もうなずいてから、続けた。

「俺もよくわかんない。でも言いたかったことは、なんとなくわかるんだ」

「いいにかつたこと？」

「たぶんだけどね。人はもう古い神様を頼らなくても、自分たちの新しい知恵で生きていけるんだって」

新しい知恵。それは、あるいはオカルトを否定した科学技術であり、平等も博愛もない市場原理のことなのかもしれない。それらはまだまだちぐはぐで問題だらけだけど、きっと人は解決していける。怪異を信じる代わりに、自分たちの知恵を振り絞って。

とまあ、他人の言葉をかつこよく安売っていると、お嬢の笑いが一層深くなった。それは自信満々で、他人をいじめて楽しむ悪魔の形になっていた。

「で、だから怪異は忘れ去られていいって？」

「うっ、結論を急がないでよ」

まだ序論なんですってば。

ここまではあくまでも、あの夜に出会った神様と、その人が言っていたこと。怪異が忘れ去られていくことについて別に悲観的になる必要はない、っていうフォローなんだから。

一息ついてから、お嬢の叛逆者を待つ魔王のような笑顔へ、今度はちゃんと持論を展開した。

「それに、どんなに時代が変わっても、きっと怪異はなくなるならないと思うよ」

あの夜出会った神様の言う通りだとしても、きっと怪異がこの世

から消滅してしまうようなことはない、俺は思っている。

怪異が完全にいなくなることがあるとすれば、それは人が空想をしなくなることと同じだ。そんなことは、きつとあり得ない。どんなに科学が進んでも、いや進むからこそ、その時代に見合った怪異は常に創作され続けている。少し前なら口裂け女やこつくりさん、今なら怪人アンサーやくねくねなどなど。それらが語り継がれる限り、小さな奇跡はどこかに生まれ続ける。

今日、どこからどう見ても日本製の人形が、メリーさんと名乗ったように。その時代に人々が一番よく知った形式にアイデンティティを預けながら、怪異はそこにありつづける。

『それでも、きみが私を信じてくれるなら、私はきみのために小さな奇跡を起こそう』

鮮明に再生できる、あの夜の最後の言葉。この言葉のすぐあとに半泣きの母が人混みをかき分けて現れ、代わりに紅い髪の様子は姿を消した。それから俺は、日常に潜む眉唾な心霊現象を笑い続ける反対で、幼き日の怪異の証明を探し続けてきた。

「封鈴堂に勤めているいま、怪異はそこにある、って胸を張って言える」

言葉のピースはまるではまりきらなかったが、それでも言いたいことは言い終えた。さてさて、魔王様はこの言葉を、どう受け取るのかな。

「怪異はそこにある、か。いい言葉ね」

お嬢は打って変わって、出来の良い回答をした生徒を褒めるように言つと、制服の上にウィンドブレーカーをはおりながら、俺の鼻先に店の力ギを突き付けた。

「配達があつたの忘れてたわ。そのまま帰るから、戸締りよろしく」
さっきまでの神妙な態度はどこへやら、完全に平時に戻ってしまった彼女を見ると、なぜか男気を振り絞った自分がばかしく見える。

拗ねる気持ちの一方で、やっぱりこの人にはかなわないとしみじ

みと思った。

「へいへい。わかりましたよ」

「よろしくね」

お嬢は配達の伝票を片手に一度店の奥に下がって、すぐに一本の竹刀袋を肩にかけて戻ってくる。それが配達物だろうか。そういえばどっかに、刀やら槍やらがひとまとめになっている場所があったな。

「じゃ、また明日」

扉をくぐる背中に挨拶を返す。いつもより動きが軽快に見えたのは、まあ、気のせいだろう。

俺も時計を確認。すでに夜へ片足を突っ込んでいた。早く終わらせないと、店の中の怪異たちが騒ぎ出してしまう。

電球の位置が悪いらしく、薄暗い店内を、懐中電灯片手に走るように施錠チェック。問題なし。在庫チェックとかは、夜中に勝手にいなくなったり帰ってきたりする連中がいるので、するだけ無駄だ。自分の帰り支度をしながら、もしどこか鍵をしめ忘れて泥棒に入られたら、なんて想像してみた。

……縁起でもないので途中でやめておく。本当にそうだったら大惨事だ。特に犯人が。

うすら寒くなったのもう一度、今度は一つ一つ入念に見ておいた。

最後に消灯して扉をくぐり、中を確認。夕日の残り日が、陳列された商品たちをうつすら青く浮き上がらせている。品棚の高そうな人形も、床の胡散臭い壺も、壁にかかった珍妙な面も、みんな同じ色に染まって黙りこくっていた。

怪異はそこにあり続ける。

「じゃ、また明日」

沈黙する小さな奇跡たちに告げてから、ゆっくり扉を閉めた。

封鈴堂神遊び

封鈴堂神遊び

バイト先の埃臭さにも慣れてきたところだっただろうか。俺の雇い主であり、骨董屋の店長である少女は言った。

『私たちが相手にしているのは、信じることで生まれる小さな奇跡なのよ』

どんな脈絡でここに辿りついたのか覚えていない。だけど、いつもは冷めた視線で世間を眺める彼女が熱を込めて語っていたせいで、このフリーズだけは印象に残っていた。

そのとき俺は、苦笑しながらレジを打っていた。

『じゃあこの世は、どうしようもない奇跡で溢れてるんだな』

少し皮肉の混じった返事に、彼女はやわらかく微笑んだ。

一言で表すなら、大ピンチだった。

敵に包囲され孤立無援の中で、俺は息を詰めて必死に打開策を練っていた。

左を見る。すでに逃げ道はない。

右を見る。すぐに敵の足音が聞こえてきていた。

初めは優勢だった。順調に敵陣に強襲をかけて前線を崩したはずだったんだが、それが失敗だった。崩したと思った戦線は実は巧妙なフェイクで、気がついたときには逆にこちらの本陣が食い破られようとしていた。

泡を食って防戦を展開した時点で雌雄は決していたのだが、俺は往生際も悪く思考をめぐらし続けていた。

冷や汗で滑る指先を震わせ、乾いた目を皿のようにして活路を探す。そして、見つけた！

俺はおもむろに右手を高く掲げ、叩きつけた。

「ここだあー！」

「はい、詰み」

「ノー！ー！」

盤面に叩きつけた玉将が、新しく打ちこまれた金の射程に収められ、逃げ場をなくしていた。金を取りに行けば後ろに控えた歩兵に刺され、戻れば別の駒の餌食になる構図。わかりやすい詰みだった。がつくりうな垂れる俺の対面では、着物姿の小柄な少女が人生の勝利者とばかりに大笑いしていた。

「慧ちゃんよわーい」

カラカラと快活に笑っているだけなのに、異常にむかつく。でも事実だから言い返せず、俺こと九十九慧はこみあげてくる悔しさを飲み込むしかなかった。

「そりゃ八十年近くも差があるんじゃないだろうもないだろ、タマちゃん」

悔しさを飲み込むとあきらめしか出てこない。相手の少女　タマちゃんは、中学生程度の外見に反して、齢百以上を数える老棋士だ。活発そうなショートヘアを揺らして平地の胸を張る姿からは、到底想像がつかない年季である。

「ははっ、猫又一の棋士タマちゃんこと、このあたしに勝てるわけがないよ」

「手加減しろよな。年寄りが大人げな」

毒づきは店内に響いた木のはがれる歪な音に遮られた。俺の首筋には、タマちゃんの小刀のようにぎらついた爪が添えられている。彼女の細い腕を視線で辿っていくと、咄嗟に盾にした木の熊の置物がバラバラに砕けていた。

耳の奥で潮騒が聞こえた。血の気の引く音だ。置物がなければ俺の喉はざつくりと裂けていただろう。

こんな危険な一瞬も、骨董屋封鈴堂の日常的一幕だった。封鈴堂は妖怪変化や、魑魅魍魎が集まるオカルトの中心地。故に反射的な危機回避術は嫌でも身についた。

舌打ちしながら手を引く彼女も、猫又と呼ばれる妖怪であり、封鈴堂の常連の一人だった。だから、こういうやり取りにももう慣れた。

文句を言おうと置物を元の位置に戻そうとして、ふいに値札が目飛び込んできた。二か月分の給料も余裕でぶっ飛ぶ数字。もうおりる物がない頭から、更になにかが失せる。

慌てて破片を探す、すでに後の祭り。ごみ屋敷の親戚のような店内で、砕けた置物の破片なんか集まるはずがない。もし全部戻っても直せる自信はないし、諦めよう。店長もちやんと謝れば許してくれる、はず。

恨めしくタマちゃんを睨むが、彼女は興味をなくして退屈そうなくくびをしている。失言も置物を盾にしたのも俺だから、仕方ないといえば仕方ないのだが。

「そういえば、お嬢はどうしたの？ 姿が見えないけど」

「なんか用事とかで隣の街まで行っているよ」

封鈴堂の店長であり、同級生の少女、九十九巫未は不在だった。

お客の妖怪や有象無象にはお嬢と呼ばれ親しまれ、あるいは畏れられている。俺も多少の尊敬をこめてそう呼んでいた。

タマちゃんが駒を整理し始めるのを見て、俺も駒を定位置に並べていく。

「大丈夫なの？ 一人で店番なんて」

並べ終わった盤上で歩兵を動かしながら、タマちゃんが尋ねてくる。俺も歩を前に出して角の動きを確保してから答えた。

「大丈夫だろ。よっぽど変な客でもこない限り」

客が妖怪なら、扱う品もオカルトゆかりの物が多い。人外の力や理屈が我が物顔で闊歩する店を存続させているのは、一重にお嬢の手腕だった。九十九の姓はお嬢と同じだが、俺は田舎出身のオカルトには無能力の一般人で、彼女ともなんのつながりもないとのこと。お嬢もなにか特殊な力に通じているわけではないが、理屈屁理屈嘘本當をまじえた論法で妖怪たちをねじ伏せるおかげで店は平穩を保

っているので、お嬢の不在は俺の命に直結する問題だったりする。

まあ、タマちゃんみたいな常連とは俺でも対応できるから、よっぽど変な妖怪さえ来店しなければ、カウンターでまったり将棋も指せるというわけだ。

「そういえば、最近変な事件あった？」

「そうだな。メリーさんの身売りくらいだな」

駒が盤上に躍るテンポのいい音を聞きながら、先週来店した珍客の話をした。

メリーさんの電話という都市伝説に則って封鈴堂を訪れた、市松人形の付喪神。持ち主を助けるために自身を売りに来たのだが、お嬢が追い返した。

一部始終を話している間にも、旗色は刻々と悪くなっていく。この盤と駒も店内から発掘した物なんだから、なにか特殊能力とかないのかな？ 大昔の棋士の記憶とかさ。

タマちゃんは今しがた取った角をもてあそびながら、感心の声を漏らした。

「付喪神の身売りかあ。まだそんなちゃんとした付喪神がいるんだね」

「ちゃんと？ おかしな、じゃなくて？」

「付喪神の本質、考えてみなよ。あ、王手」

「む」

自陣に踏み込んできたト金を桂馬で弾きですが、次の手が入ってまた王手。仕方なく玉をさげてかわす。

「付喪神っていうのは大切にすれば恩返しに宿り、ぞんざいに扱えば仕返しに宿る。本当は髪が伸びたり変な音を立てたりするモノじゃないんだよ」

「じゃあ、そういう髪が伸びたりする連中はなんなんだよ」

だんだん攻撃をかわせなくなってくる。窮地に立つ玉を守るために、話をふって気を逸らそうとするが、タマちゃんは一手も間違えない。

「そういうのは付喪神にとどかない半端モノ。ちゃんとした心が欲しいから、『もつとかまって』って自己主張するだけの子供。でも今の人間はそういうのが付喪神だって思うから、そこで止まっちゃう。だから、ちゃんと恩返しに宿る付喪神は珍しいんだよ」

長い説明の間にもミス一つしないあたり、猫又一の棋士というのもあながち間違いないのかも知れない。眉根にしわを寄せて逆転の策をひねり出そうとするが、頭が煮詰まるだけだったから、あきらめた。

「投了。勝てん」

「よし、二勝」

小柄な体で小さなガッツポーズをきめている。タマちゃんの幼げな容姿は、お嬢と対極にすることでキャラ被りを防ぐためのものらしいが、胸まで対極にする必要については疑問なので、俺は単なる若づくりだと踏んでいる。

そしてまた駒を並べ直す、タマちゃんは一手目を動かそうとはせず、頬杖をついてこっちを見ていた。

「慧ちゃんって、変わってるよね」

「どこがだよ？」

妖怪や神さまなんて理屈もへつたくれもないような連中に、変人呼ばわりされるとは心外だ。

「こうやって妖怪と将棋ができたりすることだよ。疑問になったりしないの？　っていうか、怖くないの？」

「さっき喉えぐられそうになったのは、怖かった」

「それは慧ちゃんが悪い」

「じゃあ、怖がってほしいの？」

すると、タマちゃんは哲学の問題に向き合うような顔になった。

「そりゃ妖怪は怖がってもらうのが本職なんだけど、そういう怖さじゃなくて、こう、得体の知れないモノと相對する恐怖っていうか不信っていうか」

「ああ、なるほど」

つまりは一般的な常識を超越した物事を平然と受け入れていることが、俺を変人呼ばわりする理由ということか。確かに、俺も封鈴堂に来る前だったら、狐に化かされたとか、幽霊に憑かれたとか言う奴に会ったら正気を疑うところだが。

いや、疑いはするが否定はしないだろう。そういう経験を、俺はしてきた。

「ちよつと昔、神様に会ってね。そのせいじゃないかな」

「それ、初耳なんだけど」

タマちゃんは頬杖の上に笑顔を作ると、盤上に身を乗り出した。顔、近いです。

俺は背を反らしながら、最近やつとお嬢にした昔話を始めた。

ずっと前、まだ小学生のころ、地元の大きな祭りに繰り出したときのことだ。一緒に来ていた母親とはぐれて泣いていた俺に訪れた、小さな怪異の話。あのときの幼い俺に手を差し伸べてくれたのは、今の俺と同じ年くらいの、茜色の髪と血色の瞳をした少女だった。彼女は俺の手を引いて走り回りながら、いろんなことを話してくれた。当時はチンプンカンプンだったその言葉たちを、いまだに俺は覚えている。

『それでも、きみが私を信じてくれるなら、私はきみのために小さな奇跡を起こそう』

それ以来、日常に潜む眉唾な心霊現象を笑い続ける一方で、この小さな怪異の証明を探し続けてきた。

「そんな感じで、今更一般常識とかそういうのにこだわりはしないよ」

気付くと、タマちゃんがすごく近いところで心地よさそうに微笑んでいて、恥ずかしくなって顔をそむけた。猫は表情筋が発達していないせい、人に化けている時のタマちゃんは多彩に表情を変える。

「いいね、そういうの。その神さまも、慧ちゃんみたいに想ってくれてる人がいれば大丈夫だね」

「ならいいんだけどね」

怪異は人が信じるから生まれる小さな奇跡、とはお嬢の言葉だ。付喪神も、大切にすれば魂が宿ると信じられてきたから生まれたもの。他の妖怪や神さまも同じく、ご利益を信じるから神に力が宿る。鶏が先か卵が先かという話題を本質にするのが、怪異。

大切されたから恩返しに身売りに来た付喪神に、信じる見返りに力を貸してくれる神さま。

大切にされ生き続けたことで知識を身に付けた、猫又を代表とする経立と呼ばれる妖怪。

「もう一局、やろうか」

「うん」

照れ隠しに提案した一局を、猫又の少女は喜んでくれた。

目の前の奇跡たちにしてやれることなんて、これくらいだ。

休日に封鈴堂以外にいるのはとても久しぶりだった。店番をアルバイトに任せて、私は隣の市へ来ていた。

目的地の住所を書いたメモを片手に、町はずれの住宅街を歩く。

住宅街は休日にも関わらず、閑静さを絵にかいたように静かだった。遠くの公園の賑やかさがうつすら聞こえてくるほどだ。

静かなのは好きだった。煩わしくなくていい。封鈴堂の騒がしさが気にならないのはみんながいるからで、一人でいるときは周りにも黙っていて欲しかった。

封鈴堂のみんなといえば、彼は大丈夫かな？ 思えば、家族以外に封鈴堂を任せたのは初めてだった。

あの妖怪骨董屋は一家代々受け継いできたもので、私も祖父から継いで四年になる。父が継がなかったのは、経済的に危うくなった封鈴堂を立て直すために事業を興したからで、今ではそっちもうまくいっている。封鈴堂の名目上の経営者も父だ。

あの店を受け継いで四年間、正直辛いことも多かった。なにせ今でも高校二年生の十七歳の小娘、まだ中学生だった私にあの妖怪た

ちがどうこうできるわけがなく。やつのことで彼らを手なずけたが、店の雑務まですべてこなすには限界があった。

そこでアルバイトに雇ったのが九十九慧くんというわけだが、なかなかどうして使えるではないか。不真面目にふるまってはいるけど本質は誠実だし、なによりお客と仲良くできている。妖怪たちと一緒に育った私でさえ、初めのころは付き合い方に四苦八苦したものだ。だったが、彼は短期間にほとんど自力で信頼関係を築いてしまった。

だから店番くらいはできると踏んだ。彼は自身を過小評価しているけど、私は信頼していた。

彼については大丈夫だろう。自分で選んだバイトなんだから。

住宅地の道路は迷路のように入り組んでいる。道の角ごとに張られた番地とメモをいちいち照らし合わせながら進む。すぐそのはずなのに、道が入り組めば番地も入り組むせいで目的地に近付いている気がしなかった。

でも、信頼できるがゆえに、一抹の不安がよぎる。

彼がどんなに誠実でいろんなことを任せられても、結局はアルバイト、都合のいいとまり木にとまる渡り鳥にすぎない。渡り鳥を一生縛りつけることはできず、いつかは彼も私の前から消えていく。一生を封鈴堂と生き、消えていく怪異を見送り続ける私とは違う。

たとえ、同じ九十九の末席に生きていても。

一軒の平屋の前で足を止めた。紙上の住所と郵便受けの住所は一致している。表札には大谷とあった。

私がここを訪ねたのには、先週封鈴堂を訪れたメリーさんが関係していた。あのあとやっぱり持ち主のことが気になって、ずっと昔から封鈴堂に出入りしている妖狐に訊いてみたところ、市松人形を売った着物屋の息子のことを教えてくれた。そこで、所在を妖狐に油揚げ五枚で調査してもらっていた。

残念ながら買い手当人は十数年前に亡くなっていたが、奥さんはここで独り暮らしをしているらしい。妖狐の話によればその人が市

松人形の貰い手で、何回か封鈴堂にも来ていたらしい。

家は思ったよりも小さかった。着物関連は二十年ほど前に次の世代に譲って、今ではここで隠居している。老人一人で暮らしていることを考えれば、それでも広めかもしれない。

玄関まで行って呼び鈴のボタンを押す。どこか間の抜けた高音が家主を呼びに走っていった。少し間を持つと「はい」という声と一緒に足音が近づいてきた。声はかすれていたけど、聞き心地のよい優しさがあった。

「どなたー？」

「封鈴堂骨董店です」

試す意味でこう名乗った。ずっと昔に訪れた妖怪骨董屋のことを、覚えていてくれるかな。

反応は予想外のものだった。

「あ、ちよつと待ってね」

「え？」

家主は慌ただしく家の奥に引っ込んでしまった。開かない玄関の前で途方に暮れることしばし、家主は引っ込んだときよりも騒がしく戻ってきて横開きの玄関を開けはなった。

驚くほど美しい老婦人だった。年齢はすでに八十に達しているはずなのに、それを感じないのは背があまり曲がっていないからだ。白い髪を上手にまとめており、顔はしわが目立つものの、いい老いかたをしたことが分かる優しい顔つきだった。

何故か左手には油揚げの入った袋があり、私を見つめてきよとんとした。

「あら、狐さんじゃないの？」

失礼だとわかっていたが、つい噴き出してしまった。まさか妖狐に間違われるなんて。

でも、覚えていてくれた。ずっと昔に数回訪れただけの骨董屋のことを。妖怪たちのことを。

「すみません、封鈴堂骨董店店主の九十九巫未です。今日はお話が

あつてまいりました」

老婦人は突然の来客に驚きながらも、微笑みをもって迎えてくれた。

どんなにいい話をしたところで手心が加えられるはずもなく、俺は本日三度目の黒星を喫していた。

詰められた玉を睨みながら数手遡ってみたが、タマちゃんの駒運びに隠された真意はさっぱりわからない。最低限のルールしか知らない素人には、上級者の動きは数手だけでも十分にトリッキーだ。

「やっぱキャリアはくつがえらんか」

「そりゃ無理だね。でも、慧ちゃんも相当頑張ってると思うよ」

タマちゃんは着物の袖で盤面を崩さないように注意しながら、数手前の形に駒を動かした。この局で初めて王手がかかった場面だ。

「本来将棋やチェスは記憶力のゲームだよ。盤面をみてどう展開させるのが適切なのか、相手がどう動きたいのか、思考だけで読むのには限界があるからね。そうやってでき上がってくるのが定石つてやつ。それをどう変形させるか、という利点と欠点があるのか。みんな知っているか知らないかで大きく変わるよね」

解説を交えながら、タマちゃんは双方の駒を動かしてたちまち戦況をイーヴンに持ち込んでしまう。なるほど、ゲームの進め方を知っているかどうかでここまで違うのか。そういえばいつだか、あのお嬢が妖狐相手に連敗していたが、そういうわけだったのか。

「慧ちゃんは素人なのに、ときどきすごい手を打ってくる。これだつて、少し知っていればできる範囲だし。自分が思ってるより、慧ちゃんはずっと頭がいいよ」

「んー、そうか？」

褒められるのは悪い気がしないが、やっぱりお世辞にしか聞こえないんだよな。俺はあくまでも一般人で、同じ人間のお嬢にすら敵わない。それで頭がいいと言われてもな……。

「慧ちゃんなら、『打倒お嬢』だってできるよ」

「いや無理だろ」

謙遜じゃない本心だ。頭を使うゲームで彼女と対等に渡り合っている俺、なんて姿はまったく想像できない。

すると、タマちゃんは俺の両肩を万力のような力で掴んで前後に揺さぶりながらまくし立てた。

「勝つてよ。勝つてもらわなきゃこまるのよ」

揺れる視界の向こうには、いつになく切羽詰まった様子のタマちゃん。

気持ち悪くなってきた、なんとか手を振り払った。

「なんだよ？　また妖狐と賭けでもしてんのか？」

「だって、姐御には勝てないんだもん」

凶星かよ。話題にあがる妖狐　白面金毛九尾は今の封鈴堂でも最古参の大妖怪で、神にも匹敵するその実力から他の妖怪には姐御と呼ばれている。俺たちが妖狐と呼ぶのは、人間には妖怪扱いされていた方が気持ちいいからとのこと。もちろん将棋や囲碁もベラボーに強く、生まれて百年ていどのタマちゃんなど相手にならない。

「あたしじゃ勝てないから、弟子同士で決着しようって」

唇を尖らせて厄介なことを言ってくれる。同じ動物由来の妖怪のせいか、タマちゃんをよく妖狐にかみついては痛い目を見ている。一介の猫又と伝説の妖怪狐の差は大きいが、仲が悪いわけではないらしく、傍から見ている分には二人のいさかいはほほえましい。

巻き込まれさえしなければ。

頭痛がこみ上げてくる。というか、いつから俺はタマちゃんの弟子になったんだよ？

「負けだって決まってる勝負を、なぜ受けるかな？」

「だから負けてもらっちゃ困るのお」

「そもそもなに賭けたんだよ」

すると、タマちゃんは茹でダコになって口ごもった。それだけでわかる。

「もついい。察しはついた」

こめかみを押さえて辟易と息をついた。大方店で脱ぐとか、でかいことほざいたんだろう。猫のときは全裸のようなもののくせに。

「だって、慧ちゃんが勝ったら姐御が脱ぐって」

交換条件としてはそんなところだろう。妖狐も人間に化けて来店するが、それがあでやかな美女なのだ。お嬢がそのまま成長したような姿だった。が、残念ながら俺に熟女好きはない。幼女趣味も、だ。まったく俺に得がない。

完全にやる気ゼロな俺を見て、タマちゃんは涙目でヒステリックに叫んだ。

「じゃあ負けたら慧ちゃんのズボンおろすー」

「完全にとばっちりじゃねーかつ！ 大体俺は熟女にもつるぺったんにも興味な」

今回は銅鏡が犠牲になった。銅鑼を叩いたような音を響かせて、一抱えほどの直径の銅板がくの字に折れ曲がる。盾にはこっちの方が向いているかもしれないが、しかしなんて馬鹿力……。

悪態をつこうとしてタマちゃんを見ると、折れ曲がった銅鏡を見つめて硬直していた。驚きでもヒステリーでもなく、純粹な恐怖がその瞳に映る。

俺も手元の銅鏡を見つめる。そういえば銅鏡って、呪術的な道具の意味が強かったよな。しかも封鈴堂にあるってことは

「もしかして、バチモン？」

もしかかしなくてもそうだ。

鏡面の意匠の折れ目から、真つ黒い煙が噴き出した。慌ててカウンターに放りだすが、無臭の煙はとどまることなく溢れだす。煙は店内に充満することなく天井付近で滞留し、一つの塊になっていく。不定形で歪な存在。名前もない、いわば悪霊の塊だ。封鈴堂にはこういう悪いモノを封じた『罰あたりな物』も多くある。

「くそ。タマちゃん、なんとかかない！？」

「無理だよ。形のない物は苦手」

おびえ切った情けない声が帰ってくる。まあ、馬鹿力も形がなけ

れば通じないのも当然。こういう事態は普通居合わせた妖怪に解決してもらうのだが、タマちゃんじゃ無理か。

常備のお札などを探している間に集結し終えた黒煙は、戸の隙間から外に流れて出てしまった。なにか毒吐いている暇もない。

お嬢は不祥事を起こしたことはない。彼女の顔に泥を塗ってなるものか。

本当に効くのか疑問のお札を何枚か掴み、カウンターを飛び越えて追う。うずくまっているタマちゃんをかわして戸を開け放ち、お札を構えて、俺は石像のように硬直した。

舞うは茜日、流れるは緋線。黒煙を裂いてはねる銀光に、俺は目を奪われる。あのと時の神様が、刀を提げて悪霊と対峙していた。

茜色の長髪を小さく揺らしながら、鋭い踏み込みとともに斬線が駆けあがる。物理的な干渉を受け付けねはずの悪霊は、明らかに切っ先を避けて身じろぎした。

刃が返る。切りあげた勢いで白刃をふりかぶり、少女は一步、今度は大股で一息に詰め寄る。不可避の近距離、瞳が緋色の線を大気に引き、黒煙に飛び込むように刀が振り下ろされた。

「散れ」

凜とした、あのとときと同じ声が響く。刃が通過した空白を起点に黒煙が脈打ち、霧散した。ずっと濃かった気配が薄く一帯に広がった。だが、拡散しただけで悪霊の気配は消えてはいない。一定の範囲以上に拡散する様子もなかった。

少女は最下段にした刀を、無造作に放り投げた。

「拔え」

唱え、切っ先から柄までが跡かたもなく碎ける。鐘のような音が響き渡り、一帯の大気を洗う。心を打つ一瞬ののち気配が消え、心地のいい風だけが残った。

だが、見事に悪霊を抜つたにも関わらず、少女の姿はどこか悔しげだった。

「江戸の刀ではこのていどか。落ちたものだ」

一人ごちて周囲を見回す彼女と視線が交わる。かがり火よりもずっと深い朱、血色の瞳が俺に現実を思い出させた。

踊る鼓動を感じ、呼吸が役目を思い出す。

「あ、あの」

俺が声をあげると少女が俺に気付くのは同時だった。

だが、言葉は続かなかった。色々な言葉が追いかけてきて喉を詰まらせ、言葉にならなかった。

しどろもどろになる俺に、彼女はつかつかと歩み寄ってくる。背は俺よりも大分低いため、自然と俺を見上げる形になる。その瞳に先ほどの苛烈さはなく、旧友を懐かしむ色があった。

「君が封鈴堂の九十九か。女だと聞いていただが」

「……は？」

「店との付き合いはずっと昔からだ、君とははじめましてだな」
そう言つて差し出された手を、俺は握り返すしかなかった。

家にあがり通されたのは、小さな小さな庭に面した客間だった。

縁側から入り込んだ陽の縁に座布団を敷く。簡素な和室には卓袱台と小さな茶筆筒、あとは床の間の掛け軸のみ。意外なことに、これといつて高価だったり古かったりする物は見当たらなかった。どれもそれなりだったが、なるほどセンスがいい。部屋の木目に似合った家具選びのセンスは、住人の格調の高さをうかがわせる。

と、勝手に推測している自分に気付き、苦笑が漏れた。

「職業病かな？」

鑑定眼が狂わないように日々トレーニングするのは大切だが、高校生なのに職業病とはどうかしている。

「お待たせ」

お湯を沸かしに行っていた老婦人　大谷ツナ子さんが、魔法瓶を片手に戻ってきた。ふすまを閉めて私の対面に座る。外見もさることながらその所作も、八十を越えて久しいとは思えないほどしっかりしていた。背筋が少し丸まっているのはご愛嬌といったところ。

「ごめんなさいね。歳をとると動きが鈍くて」

「いえ、そんなことは」

大谷さんは茶箆筥から茶葉の缶ときゅうすを卓袱台に並べ、お茶葉をきゅうすに入れる。そこにお湯を流し入れると、ほんのり甘さを含んだ淡緑の香りが広がる。決して高いお茶じゃないけど、その上品な香りは、彼が封鈴堂に持ち込んでいるお茶と同じものだ。

「あんまりいいお茶ではないけど」

「いえ、私は好きです」

自然にこぼれてしまう笑みと一緒に湯飲みを手取る。ちょっと熱いくらいなのが心地いい。一口含むと、こころばかり強めの甘みが、熱と一緒に舌の中をしみわたっていった。飲み込むと自然に深い息が出た。

大谷さんも一息つくと、両手で湯飲みを抱えながら本題に入った。

「それで、お話というのは？」

「付喪神に心当たりはありませんか？」

封鈴堂のことを覚えていてくれるなら、変な回り道は不要。一息で核心を突くぐらいでちょうどいいだろう。

大谷さんはしわを深めて、孫を可愛がるおばあちゃんのように微笑んだ。

「ええ、あるわよ」

「それは、いまどこに？」

「さあ？ 夜になれば帰ってくるでしょう。あ、わたしが気づいてるってことは、あのこには内緒ね」

そう言って人差し指を口の前に置く。小さな子供の秘密を知らながら黙って見守っているとは、中々いいおばあちゃんだ。

つられて私も口の前で人差し指を立てて頷いた。自然と顔を見合わせて噴きだしてしまう。

それから、ここに来た理由を説明した。二週間前の付喪神の身売りと、それを追っていてここに辿りついたこと。あの人形がかつて封鈴堂で売られた物の二代目であるという推測も含めて、すべて説

明した。

大谷さんは終始静かに、時折小さく頷きながら聞いていた。

「そんなことが。うちのこがご迷惑をかけてしまって、すみません」
「いえ、私も久々にやさしい付喪神に会えました」

ついでにあなたにも、という言葉は続けない。

怪異を形作るのは持ち主の意識であり、境遇だ。付喪神の性質は自然と持ち主に似る。あのこがちゃんとした付喪神として存在するのは、大谷さんが妖怪の『ちゃんとした姿』を知っている数少ない人間であることを示唆していた。

続けなかったのは、それをどこかで期待していたこと表に出すのが、気恥かしかったからかもしれない。

「あと、お礼も言わないとね。あのこを追い返してくれて、ありがとう」

頭をさげられてしまうと、私も困ってしまう。でも、感謝されるのに悪い気はしなかった。

頭をあげて次のお茶を用意しながら、大谷さんは懐かしむように目を細めた。

「大体あなたのお考えの通りよ。いまのあのこを見つけたのは、たった十年前」

とつとつと語られる一連の市松人形にまつわる話は、私の推測とほとんど違わなかった。

大谷婦人と亡くなった主人は私の祖父とは古なじみで、それで当時の封鈴堂にも来ていたらしい。そのとき目にとまった市松人形が、あのこの前身。

「あのころは太平洋戦争が始まる直前でね。世間もいろいろと力りしてたけど、わたしたちはわたしたちで楽しかった。あの人形も、そのころの大切な一欠片」

時代はその後、太平洋戦争へと突入していく。私の祖父や大谷さんの夫は招集され、別々に大陸を転戦していたらしい。そのころの話は祖父からも聞いていた。

一代目の人形は、やはり空襲で焼失してしまったそうだった。ここ京都は比較的攻撃を受けなかったのだが、まったくなかったわけではない。逃げるのに必死で、人形のことに気がついたのはずっとあとだったそうだった。

まもなく戦争が終わり、みんなが復員してからは封鈴堂に来ていない。こちらの祖父も忙しければ、大谷さん夫妻も稼業の再興やらなにやらで、旧交を温めている時間もなくなってきた。「気づいてみたら子供が大きくなって、孫がいて。いつの間にか主人もいなくなつて、会いに行こうとしたら貴女のおじいさまも亡くなつてた」

大谷さんは立ちあがって部屋を出ていき、何枚かの布を持って戻ってきた。

それは、人形の服だった。封鈴堂に来たときの服もある。どれもただの人形に着せるには惜しい一品ばかりだった。

市松人形というのは着せ替え人形で、今でいうところの玩具の人形にあたる。本来は芸術品ではない。

「現役時代に作った物なんだけどね。暇になればこういうものを作つてた。着せる人形はいないのにね」

口元に映るのは、照れを含んだちいさな苦笑。

それはきつと、亡くした子供のために服を作り続ける母のような感情。あるいは、感傷。

胸の奥で重たい物が沈む感覚がした。封鈴堂があんなにごみごみしているのは、商品よりも引き取り手がいなくなつてしまった道具が多いから。持ち主の妖怪は、きつともう戻つてはこないだろう。それをずっと取っておいたのは先代までの感傷であり、今でも増え続けているのは私の感傷だ。

だから、十年前にたまたま見つけた市松人形が、付喪神になった。あの人形を付喪神するために積み重なったのは、そういう長年の感傷であり、焼失させてしまったことへの謝罪なのかもしれない。

大谷さんは人形の服を腕にかけたまま、縁側へとゆっくり歩いて

行つた。陽だまりの縁に沿つて縁側に立つ。

「もし、わたしが亡くなったら、あのこを引き取ってもらえるかしら?」

縁起でもない、とは言えなかった。

だから、私は頷くしかなかった。

「はい、喜んで」

「そう、よかったわ」

こうやって、封鈴堂の品々は増えていく。

「わたしがいなくなったら、あのこを覚えている人がいなくなっちゃう。そうしたら、妖怪は死んでしまふんでしょう?」

「どこで、それを?」

「貴女のおじいさまが、よく言っていたわ。『怪異は信じることで生まれる小さな奇跡』って」

私がよく使うフレーズを人から聞くのは、祖父が亡くなり、封鈴堂を継いで以来だった。

怪異は人が信じるから力が宿る。たとえば、交通事故の多発地帯に流れる悪霊の話などが典型だ。偶然から発したうわさが、最終的に不可思議な力を作り出す。

逆に人が忘れていけば、神は力を失い、妖怪はどこかへ消えていく。それは付喪神も同じで、昭和初期に封鈴堂に流れ着いた付喪神たちでさえ、すでに消え始めている。

「昔は近所の駄菓子屋のおばちゃんや寺の住職が、妖怪たちとつながっていたのに。もう、そんな時代じゃないのよね」

大谷さんが振り返る。差した陽がしわに沿って顔に小さな影を刻む。

大谷さんの言わんとしていることに、私は先回りするように言葉をつないだ。

「人はもう怪異を恐れません。もう怪異がなくても、人は自分達の力だけで生きていけると。そういうことなんでしょう」

脳裏に彼の顔がちらついた。自分の言葉は受け売りだらけだと、

ちよつとだけ苦笑する。

妖怪たちがいなくなっていくのはもちろん嫌だが、それは時代の変遷として仕方ないことなのだ。そうやって、これから割り切って生きていくしかないのだろう。

大谷さんの表情が、試すような色を宿す。

「それなら封鈴堂と貴女、いえ、貴女たちはどうするの？」

たとえそうは見えなくても、やはり八十を越える時を生きてきた古きモノ。動物や物ならばすでに怪異となってもおかしくない年季が、深い色をした瞳の奥で揺れる。

「怪異がなくなったとき、それは九十九もいなくなるということじゃないの？」

扱いに困る客というのがいる。

ここ封鈴堂では極端に強い力を持っていたり、高い霊格を備えていたりするモノの来店はあまり珍しくない。むしろ先週のメリーさんのような、わけのわからないモノのほうが厄介だ。

だから、ほとんどのお客には人間にするように接すればいいんだが、今回は相手が相手だ。

本物の神さま。タマちゃんに訊いたところ、神話に由来を持つほどの高い霊格の持ち主らしい。

そして、幼き日の恩人で、俺の価値観に大きな影響を与えた神さま。

バイトの店番身分には本当に扱い方がわからないので、普通の客と同じように放置した。

自分が店主でないことを伝えて店に案内すると、神さまは勝手に奥に入ってしまったので、俺はカウンターの定位置に戻った。タマちゃんは対面の応接椅子ではなく、いつもお嬢が椅子がわりにしている棚に腰かけている。

店の奥にある気配に意識を向けながら、頬杖をついてばやく。

「神さま、俺のこと忘れちゃったのかな？」

挨拶の、通り向こうは俺のことを覚えていないようだ。まあ、十年近くも昔のことだし、俺もかなり容貌が変わっているから仕方ないだろう。

「気になるなら、いえばいいのに」

「そうなんだけどさ。なんか言いだしにくいじゃん」

「そう？」

小首を傾げるタマちゃんは、なんというか自然体だ。普段から妖狐などの高い霊格に接しているせいかな、あの神さまにもまったく気おくれしていない。

そんなふうには気だるい会話をブツブツとしていると、神さまは左手になにか持つて戻ってきた。

それは古びた短刀だった。お嬢から教わった最低限の知識のお陰で、それが白木で拵えた御神刀の類だと分かった。

それを見たタマちゃんが、目の色を変えた。

「あ、それってまさか……」

「ほう、わかるのか」

神さまは刃物のような印象を受ける美貌に笑みを刷き、カウンタ―に小刀を置いた。

近くで見ると、やはり古さを感じる逸品だ。いつだか写真で見た白木は雪のような清潔感があったが、これは積んできた時代の奥深さを感じられる楠色だった。

「買う。いくらだい？」

「あ、えーと」

手にとって値札を探す。その内の鋼を感じる、ずっしりとした重み。だが

「値札、ついてない」

三百六十度どこを見ても、値札のようなものは見つからなかった。困惑しながら眺めまわしていると、タマちゃんが教えてくれた。

「そのはずだよ。それ、預かり物だもん」

「預かりもの？」

「ある神社が廃社になったときに、その御神刀を預かったんだけどね。たぶんもう取りにはこないだろうし、その神さまも今はいなくなっちゃってると思う」

「そういえば、大分減ったな」

神さまは店内をぐるりと見回して呟いた。釣られて俺も店を見る。物の多さだけならごみ屋敷ともいい勝負ができる店内、減ったのは物ではないだろう。まだ少ししか勤めていないから、どれくらいの物が『いわくつき』なのか把握しきれていない。ちらりと先ほど悪霊をふきだした銅鏡を見やって、俺はため息をついた。

しかし、かつて減っていくのは仕方がないと語ったのはこの神さまで、ことさら悲しむ様子はなかった。

「時代が時代だから仕方がないが。しかし、預かり物となると、持つていくわけにはいかないか」

悲しむ代わりに、神さまは細い口元に指を当てて思索している。

「えっと、用向きによつては店長に連絡しますけど」

俺の地元の神社からはるばる来てくれたからには、なにか大切な用事があるのだろう。手ぶらで帰すのは気が引けるし、なにより妖怪や神さま相手に商売できるのは封鈴堂だけなのだから、やれることはしてやりたかった。

それ以外の私情も多分に含んでいたが、神さま嬉しそうに頷いてくれた。

「ああ、悪いね」

「それで、なにに使うんですか？」

「神遊びだよ」

……。

「タマちゃん、どっかに派手な花火が出るようなお札って、あったっけ？」

「違う違う。神遊びって、御神楽のことだよ」

タマちゃんはあきれ顔でため息をつく、今日何度目かの長い説明をしてくれた。

神楽とはざっくりいうとお祭りのことだ。御神前、つまり神さまの前で歌ったり舞ったりして神さまを楽しませる。あるいは神がかりといって、神さまを巫女などに降ろして吉凶を占たり、厄払いをしたりする儀式のことだ。

「有名なサブカルで固有名詞みたいに使われているからそっちのイメージが強いけど、その起源は天の岩戸の伝説まで遡れる。昔の和歌集にも『神遊びの歌』っていうジャンルがあるし」

「ほう、詳しいな」

神さまに褒められ、タマちゃんはくすぐったそうに鼻の頭を掻いた。どうせ俺は知りませんでしたよ、ええ。

いじけるのもそこそこにして、俺も話に入る。

「神楽に刀を使うってことは、刀剣の神さまなんですか？」

「ん？ ああ、自己紹介してなかったな。そうだな、フツとでも呼んでくれ」

フツ。確か物を斬ったときの擬音で、よく斬れる剣の意味だったかな。まんま刀の神さまだ。

「この前もいい刀を送ってもらったんだが、あっちではだめでね」

「でも、お祭りなら毎年やっていますよね？　なんでまた、こんなところで刀を？」

昔の俺が迷子になったお祭りなら、今年も盛大に行われていたはずだ。一件あって以来あの祭りには毎年通っていたから間違いない。探していた神さまには一度として会えなかったのに、まさかこんな所で再会するとは思っていなかったが。

フツさまは笑みを消して、右の袖をまくりあげた。

「これだよ」

白雪のごとく透き通った肌があるかと思いきや、晒されたのは手首から肘までまかれた包帯だった。だが、怪我にまかれたものらしい汚れは一切ない。ファッションというわけではないだろうから、なにかを隠すために巻いているのだろう。

「フツノカミ、刀剣の神は天之尾刃張あめのおはばりの巻族にあたる、同族殺しの

家系だ。転じて厄払いや勝負事を司る。だから、こうなる」

包帯の結び目をほどき、一気に引き剥がす。氷の上を滑るように包帯がはがれたその下は、想像したのとは真逆の色をしていた。

黒、正確には紫がかった気持ちの悪い黒。これ以上なく毒だとわかる危険色だ。まだ見ていられるのは、その色が皮膚だけではなくその下まで一色だからだ。

タマちゃんが目をそらす。これでマダラとか描いていたら、少し前に食べた昼飯と対面できたかもしれない。

「こんな世の中だからな。参拝客の願いに黒いモノが混じるのは仕方ないだろう」

袖をもどして腕を隠すと、フツさまは自嘲のように口元を曲げた。それを見て、胸の奥で怒りのような熱がのたかった。

こんなご時世、神さまにもすがりたくなる気持ちはわかる。だが、作りだすのが人間なら、妖怪や神さまを消滅させるのも人間だ。

人の自立と言って消えていくのを容認した神さまを、人は自分の都合で傷つける。それが、なんとなく気に食わなかった。

「タマちゃん、ちょっと行ってもらっていい？ お嬢って携帯持っていないから」

「いいけど、どこにいるのか知らないよ」

「妖狐に訊けばいいよ。朝、話していたから知ってると思う」

「了解つと」

タマちゃんは棚から飛び降り、カウンターの影になって視界から消える。

続いて聞こえたのは鈴の音。戸の方を見ると、一匹の黒猫が首の鈴を鳴らしながら、てくてこと歩いていった。

「頼んだよ」

ニヤアと一鳴きして答えると、タマちゃんの本来の姿である黒猫は、戸の脇の小窓から出て行った。

「やさしいんだな、君は」

見送る俺の横顔に、神さまは小さく微笑みかけた。

「神は人の思いで成立する。厄を受け取るのも神の仕事だよ」

「でも、人はあなたたちを消す。必要なときだけ頼るなんて」

「人が都合のいいわるいで自分を律せれば、神なんて元から生まれないさ。それも含めて、厄払いの神さまやっているんだ」

かつて神の死を人の自立だと言った神さまは、それでも自立できない人間をかばう。それが神であるといわんばかりに。

「それでも、君はいい人のようだ。名前を覚えてくれないか？」

頷きを返す。ずっと昔、あのときから探してきた神さまに、自分の存在を伝えるときが来た。

「九十九、慧です」

名前を聞いて、切れ長の双眸が初めて驚きを映した。

「君も九十九なのか？ 封鈴堂に二人の九十九か。これはおもしろい」

「あの、おもしろいつて？」

「封鈴堂に静の九十九以外がつくとは前代未

言葉はそこで途切れた。

糸が切れるように、フツさまはカウンターに倒れ込んだ。

「な、ちよつ、どうしたんで？」

「あーあ、抑えきれなくなっただか」

余裕を持たせようと軽い口調を被せているが、息づかいが荒い。まるでなにかの発作のように呻きながら、フツさまは自分をきつく抱きしめて、カウンターの上にうずくまる。

誰もいるはずがないのに、俺は助けを求めて視線を迷わせた。俺は動転して黒電話を掴んだが、こういうときに連絡するべき相手か思い出せない。

突然の変化の原因は一つ。右腕に溜まった厄だ。

それだけはわかるが、浮足立ってしまった思考はまとまらなくなっていた。

「落ち、つきなよ」

呻き声に冷や水をかけられて、定まらなかった視点が戻る。

周りを見回す。フツさま以外には、俺一人だった。タマちゃんも、お嬢もいない。そう、俺だけだ。

少しでも冷静さを取り戻す。悪霊のときと一緒、俺がなんとかするしかない。義務感がないと冷静になれないとは少し情けない。

だが、なにをすればいいかわからないのは変わらない。とりあえず悪霊祓いのお札を持ってくればいいのか？

結局右往左往は変わらないでいると、フツさまは息を荒げながら左手を差し出した。

そこには、御神刀の柄があった。

「これで、斬れ」

感情の失せた言葉に、骨を氷柱に変えられたかのように背筋が粟立つ。答えはわかっていて、それでも訊いてしまった。

「斬れつて、どこを？」

「右腕に決まっている、だろ？」

「無理無理無理、俺、人体切断なんてしたことないし！」

「君なら、できるはずだ。九十九なんだろう？」

「俺はお嬢とは無関係の九十九です！」

「だからできるんじゃないのか？ 霊媒の九十九の末裔だろ？」

「俺の人生にそんな超設定はありません！」

何度も言うが、俺はそういうオカルト能力はまったく持ち合わせていない一般人だ。そんな姓だけで特殊能力があるって思われても、どうにもなりません。

だが、フツさまは右手をかばいながら、俺の目をしっかりと睨み据えた。

血色の瞳。十年前の記憶と同じ鮮明な色が、あのときのように俺の心から不必要な揺れを抑えていく。

「頼む」

少女の口から洩れた一言で、決意が固まった。

「ええい、わかりましたよ！」

半分悲鳴になった声で叫びながら、木製の柄をひったくった。鋼

の重さをさつき以上に意識する。柄を握つてみると、滑らかな見た目に反して手のひらにすいつくような安定感を感じた。手の冷や汗を木が吸い込むからかもしれない。

鞘は思ったよりずっと簡単に抜けた。たぶんお嬢が手入れをしていたんだろ。銀の地金の片面は白銀の直刃。切れ味は折り紙つきだ。

フツさまが右手をまくる。厄のしみ込んだ、いや厄そのものが体の一部となった、痛々しい右腕。

その二の腕を掴んで、固定する。思ったよりずっと細く、温度を感じなかった。昔は確かに体温があつた気がした。

短刀を振りかぶる。刀の使い方なんてわからない。ただぶつけただけじゃ、刃物の切れ味が発揮されないことはわかる。

ちゃんと切れるかわからない。それが言い訳なのは分かっているが、それでも躊躇する自分がいた。

視線が泳ぎ、ついさつきまで遊んでいた将棋盤が目につく。唐突にタマちゃんの言葉が脳裏をかすめた。

『本来将棋やチェスは記憶力のゲームだよ。盤面をみてどう展開させるのが適切なのか、相手がどう動きたいのか、思考だけで読むのには限界があるからね。そうやってでき上がってくるのが定石つてやつ』

神楽 神遊びの中身なんて知らない俺に、その定石がわかるはずがない。神さま相手に俺が知っていることなんて、究極的には一つしかなかった。

だから、それしかできない。でも、それでいいんだと気づいた。

神さまが、強く言ってくれたから。

「信じる」

そうやって起こしてくれた奇跡があつたから、それを信じる。

短刀を振り下ろす。切っ先が肘へと吸い込まれ、切るといふよりえぐるように刃が肌の上を滑った。肉を切るのではなく、氷菓子にスプーンを入れるような手ごたえがあつた。

不格好な切り口が広がる。だが、それでいいんだと直感した。切り口から光が噴き出し、視界を真っ白に塗りつぶした。

視力が戻ったとき目の前に広がっていたのは、ただ白だけの空間だった。遠近感不在の光景から浮き出るように、フツさまだけが立っている。

白い背景に茜色の髪がよく映える。いつの間に着替えたのか、清潔感の塊のような白い道着と、紅葉色の袴をはいていた。

右の袖は空だった。

フツさまは、鋭利さを潜めた優しい微笑みを浮かべていた。その唇が穏やかに言葉を紡ぐ。

「君は、あのときの子供か」

あのときのままの声。再会した瞬間からずっと聞いていたはずなのに、初めてあのときと同じ彼女がそこにいるように感じた。

「大きくなったな」

「俺、毎年あのお祭り行っているんですよ」

「そうか、覚えていてくれたのか」

心底うれしそうに眼を細めてくれると、俺もいろいろと報われた気持ちになる。

これだけ異常な空間に放り出されて世間話というのも、おかしい気分だ。

「さて、世間話なら片付いてからでもいいだろう。いまは、神遊びを続けよう」

「やっぱり、あれで終わりじゃないんですね」

暗澹とため息をつく。あれだけ勇気出しているという決意して、きつとまだ半分も来ていないのだろう。

愚痴ついても仕方ない。やり始めたならやり遂げよう。それがお嬢に任された、店番のお仕事だ。

「君に会えてよかった。たとえ偶然でも、あのとき会えたのが君でよかったよ」

まるで別れ際のような挨拶。でも、これが始まりの言葉になるともなんとなくわかった。

「ありがとう」

だから、俺も礼を言う。

「あなたに会えたお陰で、俺も楽しくやってます」

封鈴堂の面々が次々と思い浮かぶ。あの奇妙なメリーさん、妖狐、タマちゃん。

そして、お嬢。

「それでは、もどりましょうか。フツさま ふつのみたまのおおかみ 布都之御霊大神」

神さまが頷く。視界が暗転し、またなにも見えなくなった。

その向こうで、神さまが俺の手を取った。

現実に戻ってきてまず気づいたのは、自分の服が変わっていることだった。さつき神さまがきていたような白い道着に、浅葱色の袴。神社の神主のような格好で、たぶんこれっぽっちも似合っていないだろう。

神楽は歌舞を神さまに奉納するものだが、その中には神がかりと呼ばれる儀式が派生したものがある。それは神さまを体に降ろし、神さまに自分を貸すこと。そうやって人と交流するのが神楽。

故に、神遊び。

フツさまの姿の代わりに店内にいたのは、巨大な鬼だった。形のあるものではなく、銅鏡から溢れたのと同質のもの。それを数倍に濃縮して身長二メートルほどの巨人の形に練り直したただけだ。もっとも形状以外に、紫がかった体と人体の共通点はない。

神さまから切り離された、厄の塊。銅鏡から放たれたものと同質、神や妖怪を作るのが人間なら、悪霊を作るのも人間。思いの形ということがある。

これを抜つて、神遊び終了ってことだろう。

「わかりやすくていいよ」

右手、フツさまから切り離されてしまった腕は、俺の腕を貸して

いる。それを正面に掲げる。

「布都之尾刃張」

呼ぶ、いや喚ぶ。どこからともなく白木の純白が手のひらに現れ、銀光がすらりと伸びる。太刀と分類される長刀が右手の中で質量を持つ。

布都之御霊。それは軍神たけみかつちのかみ建御雷神の剣であり、とある大きな神社の御神体となつてゐる剣の銘だ。実家の神社はその大きな神社と直接つながりはないが、日本の神霊は無限に増殖し各地に社を構えているから、その一つだろう。

尾刃張は刀を意味し、伊弉諾いざなが迦具土神かぐつちのかみを斬つた神殺しの神剣が天之尾羽張、建御雷神の父である刀剣の神さまになる。

フツさまはその巻族にあたり、布都之尾刃張とは文字通り『めちやめちやよく斬れる神の剣』ということだ。

柄をしっかりと握り、体の正面で結ぶ。真剣どころか竹刀だつて中学の授業で握つたのが最後だ。その程度の腕前。

だけど、大丈夫。妙な自信がもう一つの心臓となつて全身に活力を送る。

こつちの動きに気付いたのか、鬼が重たげに腕を振り上げた。銅鏡のあれが煙なら、こつちは粘土のような質感があつた。

鬼の丸太のような巨腕が振り下ろされる。音もなく、きつと実体もない一撃が目前に迫る。

臆さない。自然と斜め前に踏み込んでかわしながら、腕を刃で撫でる。それだけで剣先は巨腕を貫通し、斬りとばしていた。切り離された腕は風にさらされたるうそくの火のように、揺らめきながら消えうせた。

それで足を止めない。次の一撃を跳んで回避。万年運動不足の身体ではありえない軌道で足を着けたのは、天井近くの品棚だつた。それを蹴つて反動をつけ、落下しながら左腕も斬りはらう。

そうやって着地したのは鬼の懐。鬼は全身をこね直して両手を再生しようとするが、そこはすでに鬼の触れることのできない位置だ

った。

柄に添えた両手を、額の高さで結び直す。銅鏡の悪霊を抜ったときと同じ、至近での大上段。

「討ち抜え」

唱え、刃を一息に振り下ろす。脳天から一直線に刃が落とされ、両断された鬼が形を失う。斬線を台風の目にして黒雲が渦を巻き、吸い込まれるように色を失っていった。

仕上げに、俺は刀を手放した。

軍神の直系は同族殺しの家系。それをこちらの世界の常識に照らすなら、厄や悪霊を断つ剣。布都之尾刃張も同じだ。

「洗え」

最後に鐘のような音響を店内に響かせて、神遊びは終わった。

大谷さんの前で、私は喉を詰まらせた。老婦人の瞳の深淵に飲まれるのを必死にこらえながら、続ける言葉を探す。

私の九十九の姓は、本来民間霊媒師を表す記号だった。霊媒師と言っても、よくテレビに出るような胡散臭いものとは違う。例えばおまじないに詳しい駄菓子屋のおばちゃんや、町に一人はいた物知りおじさんなどがそれにあたる。地域と人に密着し、影に日なたに人と妖怪の距離を保つ者、あるいは神仏に通ずる者が自然と九十九と呼ばれるようになった。

本来ある種の同業者団体である九十九のなかでも、封鈴堂の九十九は「静」と分類される家系にあたる。人からはいわくつきの品を引きとり、妖怪には必要な物を売る。その中立性のため、いまでは怪異の駆け込み寺になってしまっていたが。

そして、彼も九十九。

最初は偶然だと思った。だが、あの神さまの話聞いて、彼も同じ『九十九』であるとかかった。おそらく神事に特化した家系だろう。本人はオカルトな力には無能力と言っているけど、それに関係した体質のようなものを受け継いでいる可能性はある。

そうならば封鈴堂に辿りついたのもあながち偶然とはいえないのかもしれないが、そのことは内緒にしていた。

彼を同じ九十九だと気づかなかったのは、こちら側の九十九は怪異の減少とともに、緩やかに消滅しているからだ。九十九が怪異に密着している以上、怪異の消滅は九十九の存在意義の消滅と同義である。

小さな祠の神さまを祭っていた九十九から、御神刀を預かったことを思い出す。そこもまた、神の不在とともに途絶えてしまった九十九だ。

先週メリーさんが帰ったあと彼に弱音を吐いたのは、怪異たちがいなくなってしまうことで、封鈴堂の、自分の存在意義をなくしてしまうのが怖くなったからかもしれない。たとえ、本当に消えてしまふことを他の誰でもない神さまが認めていようとも。

抱える不安の中心を突かれ、私は答えに窮した。

「あら」

言葉を探してうつむいていると、大谷さんはなにかに気付いたように言葉を漏らした。顔をあげると、縁側に一匹の狐が顔を出していた。細身の狐の全身は糸のような純白の毛に覆われている。こんな住宅街に忽然と、普通の獣が現れるはずはない。尻尾は二つだった、それは他の七本を隠しているからだ。

「妖狐、なんでこんなところに」

私も縁側に行ってみると、タマちゃんだとすぐにわかる黒猫も一緒にいた。黒猫は私を見上げると、ニヤアと一鳴きした。

察する。言葉を交換しなくても、状況だけで封鈴堂によくないことが起きていると予想できた。

店番を任せてきた彼の顔がよぎる。と同時に、彼の言葉が脳裏をかすめた。

「わかった。先に行つて」

二匹に言い含めてから、大谷さんに向き直った。すぐにでも封鈴堂にもどる必要があったが、別れの前に置いていく言葉があった。

気づかないうちに、私の唇はいつもの自信を刷いていた。

「メリーさんの電話という都市伝説を、御存知ですか？」

突然の話題転換だったけど、大谷さんは小さく頷いた。

「ええ、少し前に流行った、どんどん近付いてくる人形のお話でしょう？ 孫もそういう話が大好きでね」

「あのこが封鈴堂に来たとき、メリーさんの電話の通りに来たんですよ」

「そうなの。いたずら好きだからかしら」

大谷さんは話を合わせながらも、私の真意を量りかねたように小さく眉をひそめた。

私も最初は気づかなかった。だから大谷さんの問いに悩んでいたわけだったが、きつと彼ならばあっさりと答えただろう。

「あのこがメリーさんを名乗ったのは、それが現代の都市伝説で有名だからですよ。人が作ったお話にかつての怪異が存在を預けて新しい怪異になる、というのもありなんでしょう」

彼は言った。怪異がなくなるなんてことはない、って。どんな時代でも、たとえ昔の怪異が過去になって消えてしまっても、人は空想をやめないだろうから。もし人が空想をやめるとすれば、それは疑問のうまれないすべてが理路整然とした世界で、そんな世界に人は絶対に辿りつけない。

そうして作りだされた噂話が、怪異を作りだす。まったく新しい妖怪が生まれるかもしれないし、昔の怪異がそのアイデンティティを預けて生まれ変わるかもしれない。

でも、確かなことが一つだけ。

「どんなに時代が変わっても人が人である限り、姿かたちを変えながら、怪異はそこにあり続けます」

そして、怪異が姿を変えるなら、それに付き合う私たちも少しずつあり方を変える必要があるだろう。でも、そうやって私たちも生き残っていく。消えていく怪異と運命をとにもする一方で。

つまりは、そういうことだ。

「前向きなのね」

「受け売りですよ。すみませんが、今日はここでお暇します」

答えを語り終えて、私は縁側に立ちあがった。庭の隅で妖狐とタマちゃんが待っている。先に行けと言ったのに、まったく。

玄関に向かう途中で、大谷さんはキッチンに立ち寄った。

玄関で靴をはいてから、一礼するために振り返ると、大谷さんはキッチンで取ってきたビニール袋を持たせてくれる。中身は油揚げと、魚の干物だった。

「また遊びにいらっしやい。今度は、怖い話を聞かせてね」

「はい。とびつきの話を持ってきます」

礼の代わりに微笑み返してから、私は駆けだした。

封鈴堂の仕事の大半は退屈である。だから、ここまでとびぬけて疲れたのは初めてだった。

妖怪骨董屋の初店番を任され、タマちゃんに将棋でにされ、あのときの神さまと再会して、鬼と戦って。

それだけでもお腹いっぱいなのに、さらに正座までさせられるなんて正直過食だと思うんですけど……。

封鈴堂のささくれだった床には、俺とフツさまが膝を揃えて正座せられていた。結構長い時間同じ姿勢でいるせいか足がしびれてきた。隣で硬直している狸の置物が無性にうらやましくなってくる。

頭の上では、阿修羅も逃げ出しそうな形相の魔王、もとのお嬢が大音響で説教していた。それが怖すぎて、妖狐と猫又はすでに外に避難している。俺も恐怖が先行して、怒りの言葉を耳に入れられなかった。

膝の上で握った拳をひたすら睨み続ける。顔をあげないのはお嬢が怖いというのもあるが、角度によっては彼女のスカートの中が見えてしまうからだ。倫理的に自制しているのではなく、たぶんそれが見えた瞬間にボロ雑巾になっている自分が想像できるせいだ。身の安全優先。

流石に説教をすべて聞き流すのは不可能なので、断片的に内容を掴んでしまう。

説教の内容で一番大きなことは、神遊びの結果だった。最初にフツさまがやったように、あの厄払いが広範囲に効果が出る。その強力なものを封鈴堂の中でやった。

結果、封鈴堂で預かっていた罰当たりなモノがまとめて被われてしまったのだ。普通に考えればいいことなのだが、どうやらそれが気に入らないご様子。封鈴堂の中立姿勢とか初耳なんですが……。

もっと自分を大事にしろとか無茶を咎める言葉もあったが、説教全体に占める割合が少なくて泣けてくる。

ちよいちよいとフツさまが脇をつつき、小声で話しかけてきた。

「封鈴堂のお嬢というのは、こんなに怖いものなのか？」

「いや、いつもはもうちよつと静かで優しいんだけど」

「嘘だろ？　嵐神^{スサノオ}あたりの生まれかわりじゃないのか？」

「ちよつと聞いているの！？」

「はい、すみません！」

雷が落ちたように二人で背筋を伸ばす。神をも恐れぬ、というか神に恐れられる女子高生の図というのも新鮮かもしれない。

次の雷を落とすために、お嬢は息を吸い込んだ。反射で身を固くするが、吐き出されたのはため息だった。

「まあ、いい機会かもしれないわね」

呟いて、俺たちを立たせる。痺れた指先からはしる電撃が脳を貫くが、ここで崩れたら説教再開がありうるのでやせ我慢で耐えた。フツさまも同じように、目の端に涙をためて直立を保っている。

対して、お嬢は一回店内を見回し、何度か頷いてから、いつもの悪魔の笑みを浮かべた。

「店の模様替えでもしましょう。いらない品はまとめて骨董市かなんか開いて売っちゃうのもいいし、流石にこれじゃ散らかり過ぎね」

「えー、掃除か？」

「嫌なら減給」

「誠心誠意させていただきます」

店の大掃除は面倒だけど、今日ほど働いて給料カットされるのは更に面倒だ。

敬礼までしてしまった俺を残して、フツさまはすぐその後ずさっていた。

「じゃあ、私はいいな。この辺で……」

逃げようとするフツさまだが、そうは問屋がおりさないと、お嬢はフツさまの腕を絞め上げていた。骨の軋む音が聞こえたのは気のせいだと思いたい。

「お・だ・い・は？」

それを言ったときのお嬢の笑顔を、俺は生涯忘れないだろう。阿修羅どころかどんな乱神も石像に変えそうな恐怖が放出されていた。……ごめんなさい、働きます」

勝負の神さま、平伏。

結局日が暮れても、店の整理は終わらなかった。そのころにはタマちゃんと妖狐は明日も手伝いに来ることを約束して、すでに家路についていた。

フツさまも遅くなる前には解放して、封鈴堂には二人だけが残った。

いつもなら夕暮れに店じまいをするのに、今日は五時間以上の超過勤務だ。もちろんこの分は給料に含まれないから泣けてくる。

その労働の結果は、まあ上々と言えるものだった。『ごみ屋敷の親戚』が『すぐく散らかった家』になったただだったが、物はかなり減っていた。

パンパンになったごみ袋の横で、俺たちは一息ついた。今日はここまでだった。

「大分片付いたね」

「だなあ」

ちよっと視界がよくなったただけなのに、ずいぶんと広くなったよ

うに感じる。相当な歴史をずっと蓄えてきたんだからこのくらいのキヤパシティは当然かもしれないが、やっぱりちよつと感動する。

ゴミ袋の中身はすべて捨てるものだ。骨董価値のあるものや、封鈴堂らしいモノは別にまとめているから、ごみ袋の中身は無価値な代物ばかり。それでもとってあったからには、何かしらの思い入れがあったものなのだろう。まあ、俺が被ったから捨てられるようになったものもあるんだろうが、そんなのはごく一部だ。

それを一気に処分するなんて、どういう風の吹きまわしなんだろう？

ちよつと考えていると、お嬢はうんと伸びをして肩をほぐしながら、弾むように言った。

「あともうちよつとかな。あ、暖簾も新しくしたいよね」
「だねえ」

適当に相槌を打っておく。まあ、楽しそうだからいいや。

改めて、少しだけきれいになった店内を見ていたら、自然と言葉が口をついた。

「信じることで生まれる小さな奇跡、か」

いつだかお嬢から聞いたフレーズ。そのお陰で、フツさまに恩返しができた。

そのフレーズを聞いたとき、俺はそれを『しょうもない奇跡』だと言った。バイト始めの苦しさを皮肉にして答えたのに、お嬢は笑ってくれた。

「しょうもない奇跡も、悪くないでしょ？」

一人言を聞いていたのか、お嬢はいたずらっぽく笑った。だが、そこにいつもの悪魔の影は見えなかった。

時代が変わり、小さな奇跡は減り続けている。

でも、人は変わらない。その時代のありようにまかせながら、大きなものを頼り、不可思議を夢想する。それが不思議な力になり、不穏な闇になり、小さな奇跡を起こす。怪異をそこにあり続けさせる。

怪異はここにある。

「そうだね」

今度は、素直に言葉を返せた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3780s/>

封鈴堂怪喜譚

2011年7月6日03時14分発行